ノリタケ 碗皿物語

期　間／2011年**4月5日**火～2012年**9月2日**日

場　所／ノリタケの森クラフトセンター3階
ノリタケミュージアム（開館時間10時～17時）

休館日／月曜日【月曜日が祝日の場合は翌平日】、年末年始

クラフトセンター入館料／大人及び学生……500円（団体割引有り）
高校生……300円（団体割引有り）
中学生以下の方……**無料**
障害者手帳をお持ちの方、
65歳以上の方は証明書の提示により……**無料**

洋食器の「碗皿（カップ＆ソーサー）」は、コーヒーや紅茶など、主に温かい飲み物を飲むための器として使われています。それぞれの飲み物をより美味しく味わうために、形や大きさなど、さまざまなバリエーションがあります。カフェやオフィス、ご家庭などあらゆるシーンで使われており、洋食器のなかでは最も身近なものです。
東洋の磁器がヨーロッパに伝わった17世紀は、湯呑の形をしたカップに深めの受け皿を組み合わせたスタイルでした。現在のようなハンドル（把手）が付いたのは、1730年頃のマイセンといわれています。

ノリタケでは、1914年、前身の日本陶器合名会社が日本初となる白色硬質磁器による洋食器ディナーセットを完成し、アメリカへの輸出を始めました。碗皿はこのディナーセットにも組み込まれており、戦前、戦後を通し多くの製品が生まれました。もちろん戦前の日本国内においては、洋風の生活は一部の限られた人々のもので、作られる食器のほとんどは輸出用でした。

洋食器が日本の家庭に普及し始めるのは、戦後の復興期を経て生活水準が向上し始めた高度経済成長期の1955年頃からです。ダイニングキッチン付き住宅が建てられ、家庭料理に洋食メニューが登場すると、モダンで斬新なデザインで画柄の揃った洋食器は憧れの製品となりました。ノリタケは頒布会方式の販売を取り入れ、国内に洋食器を普及させました。

その後、インスタントコーヒーやティーバッグの登場によって、より手軽にコーヒーや紅茶を楽しめるようになると、湯呑に代わって洋食器の碗皿を使う機会がさらに広がりました。形や画柄などのデザインも多様化し、さまざまに変化して浸透していきました。

欧米式の生活スタイルが一般的になる1970年代にはボーンチャイナ素材が流行するなど、高品質の製品が求められるようになりました。また、1980年代にはデザイナー・キャラクター（DCブランド）商品が市場に展開され、碗皿のファッション化が進んだ時代もありました。

ノリタケの碗皿は工場で大量生産された工業製品であり、作家の作った芸術作品ではありませんが、それぞれの素材や形状、絵柄や色使いの中に、その時代背景や生活者のニーズを映して設計されています。

創立当初から現在までには数えきれないほど多くの碗皿が作られてきました。今回の展示はそれらのなかから200点余りを集め展示しています。

ノリタケミュージアム

文化と出会い、森に憩う。
ノリタケの森
ノリタケの森クラフトセンター内
ノリタケミュージアム
〒451-8501名古屋市西区則武新町三丁目1番36号
TEL 052-561-7114（代）　FAX 052-561-7276